

【参考資料】麦類赤かび病について

佐賀県農業技術防除センター

○病原菌

- ・ 赤かび病菌というカビの一種により発生する病害。
- ・ 小麦、大麦の他多くのイネ科植物に感染する。
- ・ 病原菌は麦わらなどの植物体上で越冬し、翌春の第一次伝染源となる。
- ・ 病斑上の分生子が降雨等により飛散し、伝染は連続する（第二次伝染）。
- ・ 感染適期は麦類の開花期～乳熟期（秋まきでは4～5月頃）である。

この時期に雨が多く、気温が比較的高く（20～27℃）経過すると激発する。

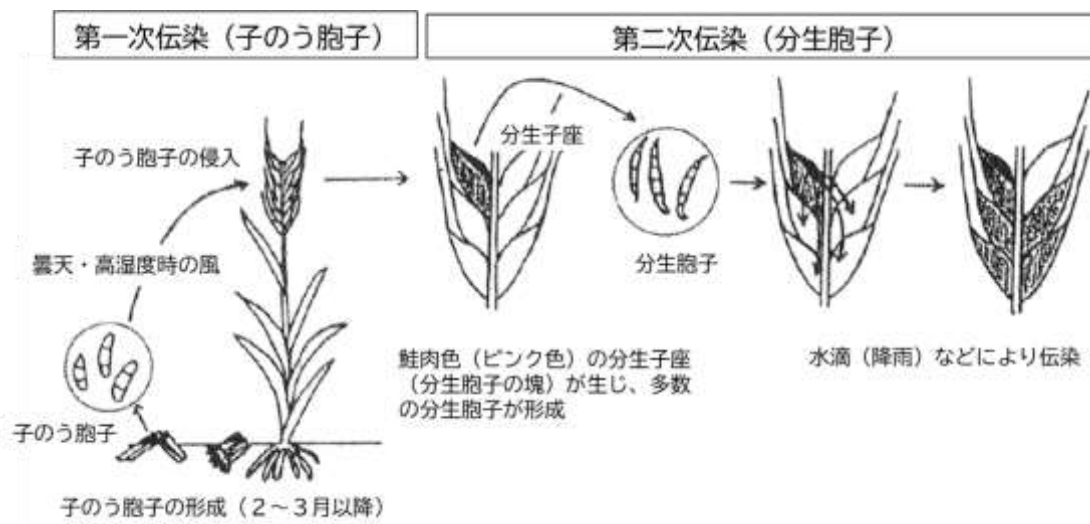


写真 小麦の赤かび病（矢印部）



写真 大麦の赤かび病（矢印部）

○麦類赤かび病菌が産生するかび毒について

麦類赤かび病の主な病原菌であるフザリウム属のかび毒として、デオキシニバレノール（以下「DON」）やニバレノール（以下「NIV」）がある。昭和30年代には、赤かび病被害を受けた米麦を摂取したことによる集団食中毒が複数報告されている。現在では、赤かび病の防除技術の進展によって被害は減少しているが、直近では令和4年産の国産小麦において、DONが食品衛生法に基づき定められた基準（1mg/kg）を超えて検出される事案が発生した。DON、NIVは加工や調理工程で完全に除去することは難しいため、麦類の生産段階で汚染を予防及び低減することが重要である。

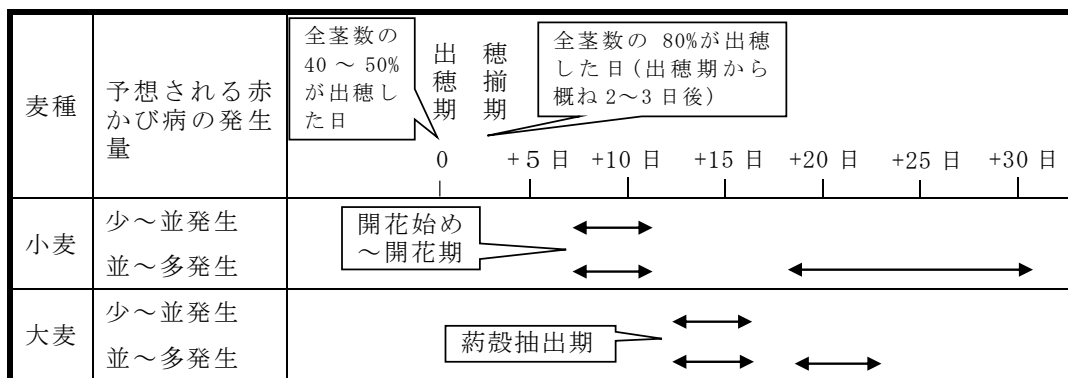
○赤かび病の防除対策

(1)赤かび病が発生しにくい環境の整備（品種、土づくり、伝染源の除去等）

(2)赤かび病防除適期の薬剤散布

小麦：開花始め～開花期（出穂期の約7日～10日後）および開花10～20日後頃の2回の防除は、発病抑制だけでなくDON低減効果が高い。本病の発生が多いパン用コムギは2回防除を基本とし、多発が予想される場合はその他品種も2回防除とする。

大麦：葎殻抽出期（出穂期の約2週間後）およびその7日後頃の2回の防除は、発病抑制だけでなくDON低減効果が高い。本病にやや弱い「はるか二条」は2回防除を基本とし、多発が予想される場合はその他品種も2回防除とする。



注1）出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2）小麦の開花期とは40～50%の穂が開花した日。

注3）大麦の葎殻抽出期とは、50%以上の穂で葎殻が見え始めた日。

注4）大麦で2回目の防除を行う場合、薬剤の使用方法（収穫前日数）に特に注意する。

注5）矢印は防除適期を示し、農薬は次表を参照とする。

防除薬剤の例（乗用型管理機による地上散布または無人ヘリ・ドローンによる空中散布）

- ・ トップジン M 水和剤、ゾル（チオファネートメチル）
- ・ チルト乳剤（プロピコナゾール）
- ・ ワークアップフロアブル（メトコナゾール）
- ・ シルバキュアフロアブル（テブコナゾール）
- ・ ミラビスフロアブル（ピジフルメトフェン）